ＮＰＯ法人矢作川森林塾

調査団体名　：　NPO法人矢作川森林塾　　団体代表者名　：　硲　伸夫
設立年　：　2010（平成22）年4月設立　　対応してくれた人の名前　：　硲　伸夫
団体URL　：　facebookページNPO矢作川森林塾
活動拠点　：　豊田市矢作川左岸・高橋～御立樋管間の高水敷　調査員　：　國村恵子、山本薫久、田中五月、村松憲吉
取材日　：　201412月22日　　レポート作成者　：　國村恵子

活動内容

矢作川の高橋（河口から40.4km地点）から豊田大橋、久澄橋を経て御立樋管（38.4km地点）までの左岸約2kmの高水敷で主に竹林伐採と河畔林再生の作業をしている。作業着手は2006年1月。その後の8年間、雨の日も風の日も黙々と竹を切り、なんと鬱蒼と茂った十万本の竹を切り終えた時、夢に描いた、堤防から輝く水面を見通せる清々しい景観が再生されていた。と同時に旧堤防と推測される所に、榎や藪椿などの潜在植生が切り払われた竹藪から解き放たれ勢いよく枝葉を伸ばして修復された。

それは、見る人の心安らぐ美しい風景であり、豊田都心部においては貴重な都市林ともなった。まさに人の手で再生された命漲る河畔林である。取り戻された風景に馴染みつつ、現在では様々なイベントがこの場所で開かれている。復活した木本は他にオニグルミ、クワ、ヤナギ類と絶滅危惧種の草本のタコノアシなどで、それら在来種の生育を促す工夫を凝らし、訪れる人々が憩える木製ベンチも随所に作られている。豊田スタジアムのレストランからは矢作川の水辺が一望でき、市民にも広く認知され親しまれるようになった。

キャッチフレーズ

夢を共有する仲間歓迎。

会のモットー（何を大切にしているか）

豊田市の中心部に、人間が自然に溶け合い、自然と共生できる緑豊かな都市林（人間観察の森）を作る。メンバーの夢の共有による絆。上下関係や利害関係がなく、ひたすら黙々と作業し、同じ汗をかく事で繋がる人と人の輪。議論する事よりも汗をかく事で、あるがまま、さりげなく心が通じ合う優しい関係。

設立から現在に至るまで変化したこと

最初は土手から川面が見えなかった荒廃した河畔の竹藪の竹を切って、川面が見えるようにしたいということであった。作業が進んできて川面が見えるようになってくると、今度は竹藪の伐採跡から生えてくる実生の木で、日本ではあまり例を見ない河畔の都市林を夢見るようになった。そして、今ではこの林をさらに進化させて、人間と自然が溶け合って共生する状況を観察できる人間観察の森を目指している。

連携している団体・専門家・自治体など

国土交通省豊橋河川事務所とアダプト（協働管理協定）を2010年10月に結び官民協働活動へと進展した。豊田市矢作川研究所。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

愛知県立豊田東高校1年生に当塾の環境改善活動を講義（1時間）現場実習（2時間）まとめアドバイス（1時間）などを行っている。次世代が育ってくれること、この水辺と河畔林に触れ合った事を、ふるさとの風景の一コマとしてほしいと願いつつ。

現在直面している課題

竹林伐採後のメンテナンスは、在来種や自生種の実生から幼木を経て河畔林へと誘導する順応的管理を行っているため、長期的スパーンで取り組める後継者の育成と組織体制。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

豊田市公園課、河川課との連携活動の強化。

今後やってみたいこと

ヒートアイランド対策を含めて、豊田都心部の緑化を進め、緑豊かな都市にしなければならない。例えば、中央公園構想を進めて、見直しを行い、森の中の豊田スタジアムにすることを考えるべきだと考えている。加茂川水門の魚道整備とガサガサ水辺の創出。魚道は木杭連結で落差勾配を緩やかに付け、ステップ・アンド・プールで水門下の水深があるプールから遡上可能とする図面も作成。

現地調査の感想

川は流れてこそ川。遮るもののない空間が広がる現地、堤防からも高水敷からも川面が見渡せる。「活動をしてこられて何が一番よかったですか」と尋ねると、柔和な笑顔で「この風景」とほほ笑みながら即答された。その言葉はかけがえのないものを得た人だからこそ、穏やかでも確信に満ちたものだった。本来なら終わりが見えない作業であるはずだが、「朝の清々しさに心惹かれて毎週、みんな来とるんですよ」と続けて言われた。その積み重ねが、この風景なのだと合点がいく。車を降りた時にオオタカが右岸上を飛び、カモ、カイツブリ、カワウが川面に浮いていた。タコノアシは冬枯れていても、やはりタコノアシである。ホオジロ、アオジが柳の枝に止まり、セグロセキレイが地面を歩いている。極め付けは豊田スタジアム前の河川敷上空を群れ飛ぶツバメ15羽。越冬燕だ。これが鬱蒼とした竹藪ならツバメは目視できない。我々の車が通ることで舞い上がった虫を採餌している。矢作川森林塾の活動が、都心部ではなかなかお目にかかれない水辺生態系再生・復権の一端を教えてくれた。来年の干支である未＝羊の顔に葉痕が似ているオニグルミの幼木小群落。オニグルミの実を埋めてある所に竹が立ててある。対岸の倒伏密生竹林との比較で、左岸作業区域の『再生した水辺と河畔林』の良さが一目で解る。夢のバトンを渡す後継者問題は、どの世界も同じだと頷いた。

＊現地取材の後、豊田市職員会館で、活動の様子をスライド上映しつつご説明頂いた。参加された方と共に意見交換した。都市林のあり方に話題が及び、「豊田市・緑の基本計画」での矢作川河畔林の位置付けや、都市緑化と都市林の今後の展望、街路樹枝打ちの問題などが話し合われた。

写真

集合写真
（前列右から
3番目が硲さん）

河畔林の次世代の
主役になる稚樹の
調査

作業風景
（伐竹）

作業風景
（草刈り）